

〈特集号〉の編集を終えて

あたかも……巨大な象が  
その群を離れて  
欲するがままに  
森の中を遊歩するように  
犀の角のように  
ただ独り歩め

(中村元訳

「スッタニパータ」より)

早いものである。水野浩一教授の葬儀が終ってから、もう一年が流れてしまった。まことに夢のように過ぎ去った日々である。いまだに信じられないほど突然の訃報のショックが生んだ混乱のなかで、生前の水野教授と親しかったわれわれ同僚たちがまず考えたことは、なんとかして教授の一周忌までにふたつの仕事をまとめ上げ、これを教授の霊前に捧げようということであった。そのひとつは、教授の遺されたタイ関係の業績を一書にまとめて、わが国の学界に提供しようということ、もうひとつは、教授が生前一貫してそのタイ国農村研究に関する論文を寄稿し続けてこられた『東南アジア研究』の1冊を、故水野浩一教授を偲ぶ特集号として発行しようということであった。遺編の出版については、幸いにも創文社の御厚情と、文部省から出版助成をいただいたおかげで、『タイ国農村の社会組織』という書物が一周忌に間に合うよう刊行される運びとなり、関係者一同胸をなでおろしている次第である。この場をかりて、創文社と文部省に対して心より感謝を申し上げたい。

一方〈特集号〉の方は、お手許の本号がそれだが、編集者らの非力と不手際から多くの方々にご迷惑をかける仕儀となってしまった。当初は、東南アジアと日本との比較を中心に特集号を編む予定で、とりあえず、身近な方々

にそのテーマで寄稿の打診をした。しかし、突然の悲報のあとに急きよたてられた計画ということで、本来お願いすべき方に声をかけるいとまもなく、またせっかくご寄稿のお申し出をいただきながらも時間切れのためお断りせざるを得ない破目におちいるなど、まことに失礼なことになってしまった。ご迷惑をおかけした諸先生の御寛恕をひとえにお願い申し上げる次第である。

こうした事情にもかかわらず、もしこの特集号のくわだてに意義ありとすれば、それは数々の悪条件のなかで寄稿下さった各執筆者個人の、故水野教授に対する哀惜の気持が、それぞれに力のこもった作品へと結実したことによるものといえよう。

水野教授が初めてその生涯のフィールドとなったタイ国の土を踏んだのは1964年のことであった。その後15年間、“寡黙の人”水野教授は、あたかも〈犀の角〉のように、世のあらゆる名利を超越して、独り学問の大道を静かに歩み続け、日本人による真にオリジナルな思考の軌跡を、見事、世界の学界のなかに位置づけることに成功した。

葬儀ののちしばらくして、1通の航空便が東南アジア研究センター所長の許に届けられた。それは若き日の水野教授が、学問への情熱をたぎらせたコーネル大学の〈東南アジア・プログラム〉の Director からの追悼の手紙だった。その手紙は、つぎのような文章で結ばれている。

We, too, feel keenly this loss of a former student, a friend and colleague, and a fine scholar.

心より教授のご冥福をお祈り申し上げます。

合 掌  
(特集号編集責任者)